

IV 「甲骨文」における「書体」とは何か

問題の所在

河南省安陽のいわゆる殷墟いんきょから出土した甲骨片は、数え方にもよるが、十数万片とされ、ほぼ紀元前十四、十三世紀の交より同十一世紀の中ごろまでの二百数十年間にわたる、在位した王でいうと第二十二代の武丁から第三十代の末王帝辛に至る九王の時代の所産である、と考えられている。

冒頭から、奇妙な計算をもちだすようであるが、この間を仮に二百年（＝七万三千日）として、十五万片が現存するとすれば、現存甲骨片は、この長期間にわたって、毎日缺かさず二片ずつが生産されていたことになる。仮に当時作られた甲骨片の十分の一が発見されているとするなら、毎日二十片ほどが作られていた計算になる。もつとも、これは、現存甲骨の平均的な大きさ（断片）を前提としての話であって、断片の二十個は、大略完整な亀甲や牛肩胛骨の一枚分くらいに相当するであろうか。そうであれば、殷後期ともいわれるこの時代、完整甲骨の各一枚ずつ程度が、毎日、王朝の占卜せんぼくのために用いられ、一枚には百字〜二百字くらいの卜辞ぼくじが刻字され続けた、と想像してみても、それほど大きな見当ちがいではないかもしれない。こういった量的な推測は、古代史料に関して様々な想像をしていく前提として、かなり重要なことである。（ある甲骨一枚、たとえば『殷虚文字丙編』中の多数の完整亀版やいわゆる河井大亀のように、これら各々が数十日間に使われていたことがむしろ通例であるが、そのことは、上記の推算と矛盾するものではない。占卜は、その内容ごとにいくつもの甲骨を同時並行して用いるのがふつうだったからである。）

さて、本稿で問題としたいのは、殷の王室の内部で、あらまし右のような数量の甲骨が日々作り出されていたとして、そこに見られる文字の「書体」は、二百数十年間に、五回ほど大きく様変わりした、といわれる。これが、甲骨のいわゆる「断代研究」の成果による「五期区分」である。一九三三年における最初の提唱者・董作賓とうさくひんによれば、

第一期 武丁時代

「雄偉」

第二期 祖庚・祖甲時代

「謹飭」きんちよく

第三期 廩辛りんしん・康丁時代

「頽靡」たいび

第四期 武乙・文武丁時代

「勁峭」けいしやう

第五期 帝乙・帝辛時代

「嚴整」げんせい

に区分しうるのであって、各期それぞれに独特の「書体」を示し、右に示したように、たとえば第一期についていえば、「雄偉」と評しうるような立派で堂々とした書風のものである、とした。

断代研究そのものは、その後の研究者によって徐々に検証され、精緻化されて今日に及んでおり、その成果を甲骨研究の基底に据えることができる。これに基づいた甲骨分類が多方面での甲骨研究に応用され、多大の成果を挙げたことも、広く知られているところであろう。その基本的な論理過程に疑問を呈する研究者はいない、といつてよい。

ただ、その中で論じられ、またその結果、実際に断代研究中に応用されている「書体」論に限定

して問題を考えてみると、実は様々に疑問が生じてくるようである。たしかに、断代研究の結論として提唱された「書体」論は、現実に一片の甲骨の時期を判定する際に、極めて有効である。経験を積んだ甲骨研究者であれば、任意に示された一片の甲骨片に、わずか三、四字しか刻されていないくても、内容にかかわらずその「書体」から、おそらく九割以上のものについては、一見たちどころに右の五期区分に基づいて、第何期の甲骨、といい当てることが容易なはずである（誤解のないようにいっておくと、ごく一部に、書体から決定しがたいものも残ることも事実であるが……）。

しかしこのことは、逆に「甲骨文」の場合、「書体」のみから、何故そこまで確実な分期が可能になるのか、が疑問とされねばならないであろう。ひろく中国書道史を考えてみて、殷周金文であれ、木簡であれ、石刻であれ、敦煌文書であれ、そういった、ある程度まで大量にまとまったものとして今日われわれが見ることのできる古文字資料は、いずれも何百年間かにわたって作製されているのであり、その間にそれぞれが独自の時代的変遷を遂げ、したがってそこには「書体」の変遷がある程度までは見えてとれるし、そのこと自体が重要な研究課題になっていることは、今さらいうまでもない。しかし、各分野の研究者の努力にも拘わらず、それは決してそれほど明確なものではあり得ず、変遷自体、非常に複雑なプロセスを示す。

一例を殷周金文に採るなら、ほぼ殷代後期と目しうる金文はたしかに存在するけれども、「書体」のみからでは、それが西周初期のものと同様に明確に区分しうるかという点、必ずしも厳密には区別しが

たく、語句や文章内容といった書体以外の要素に頼らざるを得ない場合がほとんどである。かつ、殷代後期と判定し得たものについても、「書体」上多様なものが存在し、単にその「書体」から前後を決定することも不可能に近い。西周中、後期の金文についても、同様のことがいえよう。

こういったことは、古文字資料のみならず、あらゆる場合に一般的にいえることで、そのよい例が、考古学における土器の編年であろう。考古学者は、土器の器形、材質その他を指標に類似点と相違点を抽出し、その変遷を跡づけようとする。その結果、多くの場合、考古学者はまず一定の時期の器物を前・中・後期に区分する。しかし、必ずその中間的な、どちらつかずのものが残り、定期的に細分化することによって、それを説明しようと試みる。また、一線的な変化では説明しきれず、いくつかの複雑的な変化を考えだす。かくて、分類は限りなく細分化されていく。ただし、そこには必ず、あるなだらかな変化が見てとれるようになっていく。このことは、たとえば日本の縄文式土器の編年研究の現状を想起してみればよいのであって、これは、考古学的なモノに対する観察の結果、常に出てくる現象である。

文字もまた、人間がつくったモノのひとつである。モノである以上、その歴史の変遷のしかたが、右の原則から外れることはあり得ない。金文や木簡等々の文字の変遷を想起してみても、土器以上に複雑でこそあれ、原則的には右の事情と何ら異なるところはない、と思われる。

しかるに、「甲骨文」の「書体」の変遷のありようは、これと極端に異なるというべきであろう。

二百数十年間の所産の多数の「甲骨文」を、書体的にいくつかの群に、かなりシャープに分類してしまうことが可能であり（であるからこそ、単に「書体」だけから、どの群に属するかを迷わずに指摘できるのである）、しかも、それを時期的に一線に並べた際の「変遷」は、決して「なだらかな変化」を示すものではなく、「謹飭」グループが、突然、「頽靡」グループになったり、「厳整」グループに移り変わったりするのである。このような「変遷」は、考古学での様式上の変化のしかたや、また書道史において想定されているであろうような「書体の変遷」観には決してなじまない、別個の説明原理が必要となると、いわざるを得ないようである。

その点を考えるのが、「甲骨文」における「書体」とは何かを考える、最も基本的な課題であろう。それは、書道史の劈頭へきとうでまず「甲骨文」が紹介され、それが書体変遷史の第一ページとして、殷代における「書体」の変遷として語られてよいものであるのかどうか、といった問題でもある。

董氏断代研究における「書体」論

董作賓は、右に述べた「断代研究」において、それを可能とする方法を「十個の標準」と称し、以下の十則を挙げている。

- 一、世系
- 二、称谓しょうい
- 三、貞人
- 四、坑位こうい
- 五、方国
- 六、人物
- 七、事類
- 八、文法
- 九、字形
- 十、書体

いま、このすべてに立ち入って説明を加えている余裕はないけれども、われわれがこの際注意しておかなくてはならないのは、この「十個の標準」とは、(董氏は決して論理的に個々の「標準」もつ意義の位置づけを明示しているわけではないけれども)決して並列的に等価値をもつものではないという点である。ごくはしよって、董氏のいうところを分かりやすく勝手に整理すると、次のようになろう。

董氏の研究以前の段階で、王国維その他の努力により、「甲骨文」と古文獻との比較研究から、